

佳作

夏と私とキアゲハと

茨城県 下妻第一高等学校一年 岩室 旭

私は以前、キアゲハの幼虫を育てたときに大きな感動をおぼえました。

小学校二年生の夏休みのことです。毎年恒例の貯金箱作りに飽きてしまった私は、その年、自由研究をしてみようと考えていました。

私がキアゲハの幼虫を育てようと思ったのは、祖父が畑にいた幼虫をとってきて、私に見せてくれたのがきっかけでした。幼い頃から昆虫が好きで、カブトムシやクワガタを飼っていた私は、キアゲハを育てることを決め、自由研究のテーマを「キアゲハの観察」にしたのです。

カブトムシやクワガタを飼育したことはあっても、蝶は飼育したことがなかったので、すぐに本屋へ行って蝶の飼育の本を買ってきて勉強をしました。蝶はカブトムシやクワガタに比べてデリケートな昆虫で、気温や湿度にも気をくばらなければならず、当時小学校二年生の私には、困難でした。そこで、父親と二人で様子を見ながらの飼育が始まったのです。

キアゲハの幼虫はニンジンの葉やパセリを食べ、日に日に大きく成長していきました。

私は毎日毎日朝から晩まで虫ケースの前に居座って写真を撮ったり、成長を記録したりしました。

やがて幼虫は虫ケースの中でさなぎになり、動かないキアゲハを観察しつづけるようになりました。虫ケースを激しく動かして、さなぎを落としてしまったら、キアゲハは死んでしまう、と細心の注意をはらっていたのを今でも覚えています。動かないさなぎが少しずつ少しずつ色を変えていく様子は、私のドキドキ、ワクワクという期待の気持ちを更に大きなものに変えていきました。

さなぎになってから数週間が経ったある日の早朝、私は父親に起こされ、眠い目をこすりながら虫ケースのところへ行くと、そこでは、五匹いたさなぎのうちの一匹がちょうど脱皮を始めたところでした。眠かったはずなのに、いつの間にか眠気はふき飛び、虫ケースの中を食い入るようにつめながら、

「頑張れ。頑張れ。」

と何度も何度も声をかけ続けました。

結局、キアゲハの脱皮が終わったころにはいつの間にか外が明るくなっていました。

その後、私は何枚かキアゲハの成虫の写真を撮り、虫ケースをベランダに出して箱を開けました。すると、キアゲハは数十分後、飛びたっていました。元気に広い空へと飛んでいく姿を見たときは嬉しくて、涙がこぼれたほどでした。

一匹、また一匹…と飛びたっていたキアゲハでしたが、五匹のうちの一匹だけがいつまで経っても脱皮することも、元気に飛んでいくこともありませんでした。死んでしまったキアゲハを見て、悲しくなっただけではなく泣いていました。多くの喜びの後の大きな悲しみでした。

夏休みが終わり、学校へ提出した「私のキアゲハ観察日記」は、学校で展示されました。今でも、そのレポートは大切にしまっています。

小学校二年生で初めて体験したキアゲハの飼育はそれから二、三年間、毎日毎年夏休みに行われ、その度に様々な苦労と幸せ、悲しみと喜びを体験しました。半数ほどのキアゲハが死んでしまったことがありました。虫ケースの中から脱走した幼虫が玄関の壁の天井近くでさなぎになり、窓を開けたときに飛びたっていたこ

ともありました。そんな出来事の一つ一つに一喜一憂し、その一つ一つが大切な思い出でした。

今、ふり返ってみれば、あの数年間に繰り返されたキアゲハの飼育は、まだ小学生で幼かった私に生命の大切さ、儚さ、自然界で生きのびることの苛酷さと自然の美しさを教えてくれました。脱皮して羽を広げたキアゲハの美しさはいつまでも忘れません。

夏になり、美しく飛ぶ蝶を見る度に思い出される、小学校二年生の夏のことでした。